論点に関する前回部会（3/27）での主な意見・やりとり内容（住民参加部会）

（１）計画策定、推進（４．１、５．１）について

＜住民との協働、人材育成＞

○住民との協働

・住民との協働を担保するのが河川レンジャーと拠点というだけでは足りないと思う。事業アセスメントの手続きを見直し、住民が参加し、その努力が活かされる仕組みや体制を行政側からつくるべきだ。

→ある運動をしている団体に定常的に業務を委託する場合、その団体なり個人なりの仕事を毎年評価する仕組みも必要である。

→あまり固定せずに試行錯誤しながら、進化させていくのがよい。

・上流、中流、下流の流域住民の話し合いや交流等の参加のあり方も検討してほしい。

○河川・環境教育の目標設定とそれに合った人材育成

・説明資料（第１稿）5.1.2 で「地域の自然等に詳しい団体等から人選した河川レンジャーに河川・環境学習指導等を試行的に依頼」とあるが、まず河川整備計画における河川・環境教育の目標を明確にする必要があり、そのうえで、その目標に合った人材を育成する仕組みや支援制度などについて考えていかなければならない。

→提言を踏まえて河川レンジャー部分を書いているので、提言と合っていない部分があるなら教えてほしい。（河川管理者）

→河川レンジャーを制度として位置づけ、国が人選するのがよいかどうかは疑問である。河川レンジャー制度を導入する前のプロセスとして、実際に参加の試みを進めていく中から住民をまとめ提案ができるような人が出てくることが必要だ。

＜河川レンジャーの目的、位置づけ、役割等について＞

○河川レンジャーのあり方

・行政からの信頼も必要だが住民からの信頼がなければ実際には成り立たない。

・地域に住む人は、省庁の縦割りの中で生きているわけではない。したがって河川レンジャーを「河川整備計画をきっちり専門的に語れる人」などに限定しない方がいいと思う。

→河川レンジャーは個人だけでなく、複数の人々、ＮＰＯ（新設含む）等も視野に入れて検討すべき。

○名称について

・横文字は一般には理解しにくいので、誰にでもわかるような言葉に直すべき。レンジャーには管理するという意味合いが強い。

→新しい概念であるので、河川レンジャーは仮称とし、その正式な名称も含め、あり方や役割等を様々な主体が関わって検討し、つくりあげていくことが必要だ。

→「川守り」のような子どもからお年寄りまでわかる親しみやすい言葉にすべきだ。

○河川レンジャーの活動拠点について

・整備内容シート（第１稿）の内容では地域社会へ入り込むような視点が不足している。河川レンジャーの拠点のイメージが、地域から見た専門家がいない「アクア琵琶」等であることに河川管理者側の勉強不足を感じる。

→よりわかりやすいものを目指して整備内容シート(第１稿)を用意した。活動拠点については、現在実際に活用し得る具体的な施設の名を記した。（河川管理者）

→各流域で既に行われている活動の拠点やネットワークを参考にすれば、自然と具体的なイメージも出てくるのではないか。

→拠点の問題も含め、仕組みを考えるよりもまず必要性をつくることが大事ではないか。必要性をつくれば形はできる。

→最初からパーフェクトなものを求めても簡単にはいかない。まず、出発点として何らかの基本を置いておくべき。

以上